

戦前におけるシャンハイ・イメージ (注1) の一断面

— 『支那 (注2) 在留日本人小學生綴方 (注3) 現地報告』を中心として—

徐 青

1. はじめに

日本人ほど「上海」について語りたがる人間は世界のどこにもいない、と日本上海史研究会のある研究者は言ったことがある。これは事実なのか、それとも単なる思い込みなのか。それを証明することは難しい。

だが、最近出版されている夥しい「上海もの」の存在は、その事実を如実にもの語っている。中には、文人たちの「上海もの」だけではなく、かつて上海に住んだことのある一般庶民の記録や回顧録も多くある。大人だけではなく、幼少年期を上海で過ごした人々の記憶も、文字化され、映画化されてさえている。

例えば、林京子の『上海・ミッシェルの口紅』は彼女が思春期を戦時上海の街で過ごして成長してゆく回顧録である。スピルバーグにより映画化された『太陽の帝国』は、イギリスのSF小説家J・G・バラードの体験をつづった半自伝的な長編小説である。バラードは林京子と同様に、1930年上海の公共租界で生まれ、その父は中国で会社経営を営む英国人であった。太平洋戦争勃発後の1942年、日本軍は租界内に住む西洋人全員を上海の郊外の龍華強制収容所に押し込んだが、バラードはそこで3年間を過ごした。そして、日本敗戦後、家族と共にイギリスに戻った。

林、バラードの二つ作品は共に、第二次世界戦争前に上海に居住していた外国少女少年の目を通して、戦時下の上海を認識し記録するものである。

ここで主に取り上げる新居格編『支那在留日本人小學生綴方現地報告』(以下『綴方現地報告』と略)は、当初上海で生活していた日本人小学生たちが見た、あるいは聞いた、中国都市印象をめぐる作品集である。この『綴方現地報告』を通して、当時の外地(注4)にいる日本人の子どもへの初等教育がいかなるものであったのか、またそれによって、戦

時下において、日本による中国侵略の正当化の〈メディア/媒体〉となることを期待された子どもたちの声が、いかに権力により操作され、「少国民」形成に到ったのかについて、以下考察していきたい。

2. 先行研究

「綴方」に関する研究はどのような状況か。簡単にまとめると次の三つの傾向があるとされている。第一に、戦前期の綴方運動に関する研究、これは『赤い鳥』など児童向け雑誌との関わりについての研究、第二に、内地の国語教育に関する研究、第三に、外地（植民地や租界など）の国語教育に関する研究である。

第一、二については、例えば、鶴見俊輔「日本のプラグマティズム—生活綴り方運動—」、(鶴見 1983 : 41-63)、坪井秀人「少女という場所—踊る少女/歌う少女/書く少女—」『感覚の近代：声・身体・表象』(坪井 2006 : 330-371)、田中俊弥「文集実践の教育史的考察—生活綴方の動向をめぐって—」(平成 10 年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C) (1) 研究成果報告書)等がある。高崎隆治『戦場の女流作家たち』(高崎 1995)には、豊田正子に関する一章もある。

第三の「外地の状況」について論じたものとしては、わずかに、小島勝「第二次世界大戦前の在外子弟教育論の系譜」(小島 1993)、小島勝「上海の日本人学校の性格」(小島他 : 1999a)、小島勝「中国における日本人学校の動向」『日本人学校の研究—異文化間教育史的考察—』(小島 : 1999b)、『在外子弟教育の研究』(小島 2003)。そして、熊本哲の「『日滿綴方使節』とその作品：昭和十四年『東日小学生新聞』の懸賞『綴方』について」という論文があるのみである。

現在調べているかぎりでは、「上海」という「外地」の日本人初等教育における「綴方」に関する研究は小島勝の研究しかない。戦前上海に、最も多い時では 10 万人の日本人が住んでいたことを想起すると、この日本小学生における上海印象の研究がいかに少ないかという事実も実に興味深い。ここでは小島の研究を前提としておきたい。

小島勝「上海の日本人学校の性格」には、「上海という生活空間・教育環境におかれた日本人学校はどのような特色を帯びるのか。そこでの教員の教育営為や児童生徒の学習形態、親の教育意識は、どのように形成されるのかなどの問題意識をもって」(小島他 1999a : 136) いるのかを論じたものである。その第三節「児童生徒の異文化体験—作文の分析を通

して一」では、1939年10月10日に発行された新居格編『綴方現地報告』、1940年12月24日に発行された井口績編『大陸に育つ 皇紀二千六百年記念号』（上海第二北部日本尋常小学校）、1940年12月25日に発行された鈴木七郎著『皇紀二千六百年記念、日本民族小学生作品集』（日本力行会）の三つの作文集について分析している。しかし、そのうち、『大陸に育つ』は一枚のみの作文であり、『日本民族小学生作品集』では上海に関する作文はわずかに6編しかない、と小島自身も不満をこぼしている。

結局、小島論文は『綴方現地報告』を中心に分析しており、当時の在外日本人児童の基礎データの整理分類も非常に全面的で綿密である。また、「中国における日本人学校の動向」（小島：1996b）という論文においても、当時上海の日本人学校に勤めていた日本人教員たちの教育体験、意識についての研究を詳しく行っているが、戦争によって中国人に関する印象が明らかに変わった部分における再検討が不足している。特に、作文のモデル化の問題、大人による「直し」の問題などへの分析と批判が欠けている。

本稿で着目したいのは、1937年7月7日に起きた蘆溝橋事変（中国では、七・七事変）と1937年8月13日に起きた第二次上海事変（中国では、八・一三事変）以降の日本人小学生たちが、どのように上海を見て来たのか、どのような印象を残したのか、日本小学生たちの視線と心理はどのような変化をしたのか、そして、彼らの作文のモデル化などの問題である。

本来ならばその分析に加えていくべき研究資料は多いのであるが、ここではとりあえず小島に倣い『綴方現地報告』に集中しつつ、蘆溝橋事変勃発前年の1936年9月21日に創刊された『日本小学生新聞』（昭和12年1月5日から『東日小学生新聞』と改名）（注5）と亀井文夫編集、松井翠声解説の記録映画『上海——支那事変後方記録-3』（以下『上海』と省略）（注6）などについても若干の検討を加えていくことにしたい。

3. 新居格と上海

『綴方現地報告』の編集者新居格は、1888年3月9日徳島県に生れた。新聞記者・作家・評論家・翻訳家・思想家・政治家・随筆家・生活協同組合運動家・アナキスト・ジャーナリスト・モダン文学者など、実に多くの顔をもつ存在である。まず、和巻耿介の『評伝新居格』などにある情報をまとめ、この編者の横顔を描いておこう。

「モダン・ガール、モダン・ボーイ（モガ、モボ）などの新造語の生みの親」とされて

いる新居は、七高（現在の鹿児島大学）を経て東大に学び、政治学科を卒業した。その後、「読売新聞」「大阪毎日新聞」「東京朝日新聞」などの記者生活を経て文筆生活に入り、文学評論、社会時評、風俗批評に腕をふるう一方、アナキズム思想家としての活動もあった。大正期には『労働文学』『新興文学』『種詩く人』『文芸戦線』その他の左翼雑誌に執筆し、昭和のアナ・ボル文学運動の対立期にはアナキズムの主張をつよめた論陣を張った。第二次大戦後、最初の地方選挙で推され、東京の杉並区長に当選して話題をまいたが、戦前から生活協同組合運動の実践者であった。

彼の著書を調べていくと、業績は多く、実に多岐にわたっている。有名なパール・バック『大地』、『ジョヴァンニ・パピエリ自叙伝』、スタインバック『怒りの葡萄』などに代表される訳業もある。また、1951年に、もと京城帝大で教鞭を執り朝鮮の巫俗研究で有名で、愛知大学に郷土研究所を設立した愛知大学文学部長秋葉隆より、「現代文学論」の講義を依頼されたこともあった。同年11月15日に死去、享年63歳であった。

『綴方現地報告』をする前に、新居格と上海との関係を整理しておかなければならないであろう。彼はいろいろな、いわゆる「上海もの」（注7）を書いていた。魯迅との交渉もあって、魯迅から詩をもらったことはよく知られる逸話である。

新居格は、2回中国および上海に行ったことがある。第一回目は1929年、モダニズム系雑誌『近代生活』の同人との50日間の旅だった。その際、上海での滞在は一週間だった。滞在中に毎日新聞社で、丸山晚霞と共に「文芸と絵画の夕」と題する講演をしている。上海での文学者との交流も無視できない。上海で内山書店を通して、張資平、程祥栄、郁達夫らと知り合っている。また、その後、9月26日北四川路「新雅」にて安徽に行く郁達夫の送別会と新居などの歓迎会が開催され、張資平、田漢、傅彦長、鄭伯奇、鄭祥栄、陶晶孫、大阪毎日新聞の波多江種一と田中幸利、竹屋治三郎、秋元次郎、三菱会社の竹内良男と平野勉、日清汽船の松尾免洋、菅原英次郎らが列席した。

西村（2003：24-48）によると、「この訪中の結果、新居は中国についての論述を本格的にはじめることとなった。また、中国関係書籍の翻訳を始めるきっかけを得たのも、この中国旅行である」という。これについては、新居自身がアンドレ・マロウ著『熱風—革命支那の小説—』の「訳者序」にも述べている（マロウ1930：1-3）。

第二回目は、1934年5月22日、神戸、長崎を経て、上海に到着、内山書店で鄭伯奇、穆木天などの文学者にもあった。26日南京に着いて、中山陵など訪ね、28日上海に戻っている。6月8日香港に到着、9日広州、14日上海航路へ、20日日本に帰国した。上海での

滞在は前後合わせて約 18 日間だった。

この第二回目の中国および上海の旅では、いろいろな中国の知識人と会っている。特に、内山書店の内山完造の紹介で、魯迅と知り合った。魯迅に対して、「超群な世界作家」と深い印象を残している。魯迅も新居の求めに応じて、「無題」（注 8）という詩を書き、記念として贈った。同時に、新居格の長女新居多美子が画を勉強していることを知った魯迅は、自分が編集したソ連の版画集『引玉集』を、新居格に頼んで多美子に贈っている。同年 6 月 26 日、魯迅は新居格の長女新居多美子からの感謝の手紙をもらい、この話は後に逸話ともなっている。

4. 「綴方」と『綴方現地報告』の歴史背景

新居はなぜ「小学生綴方」をまとめようとしたのであろうか？ そもそも、「綴方」とは何か？ 日本近代史においては、かつて『綴方生活』（1929～1937）という雑誌が存在し、鈴木三重吉（1882～1936）らの影響下に展開された「作文教育思想」、あるいはその方法論・運動論の総体を指す概念である。それは、生活に即した題材で自由に書かせ、子どもの生活実感を生き生きと描き出すことを重視したとされている。

「生活綴方」はいつ頃誕生したのか？ これも重要なポイントである。鶴見、久野の共著（1956）に拠りながら、以下にその誕生の社会的背景を確認しておく。

昭和初期は、東北地方を中心に農村の不景気・凶作はすさまじく、借金や小作料の支払い、生き続けるための食費、農業を続けるための肥料代などのために、娘たちを身売りする農家も少なくなかった時代であった。そんな中、教師・村山俊太郎（山形県）は、子どもたちに現実眼を向けさせ、どうして貧乏で苦しい生活が起こっているのかを知り、それを乗り越える意欲を起こさせねばならないと考え、詩や作文を通して生活意欲を起こさせることができるのではないかと、その実践を行なった。さらに、東北地方の教師たちで活発に交流し、機関紙も各地で発行されるようになり、全国にその活動が広がり、北日本国語教育連盟も生まれた。その後、戦時体制に総動員されていく時局の中で、綴方だけによらない総合的な生活教育や児童文化運動を標榜する『生活学校』グループの影響力が大きくなり、昭和 12 年を境に、それまでの綴方教育の再検討がおこなわれた。

これに対して政府は、「貧乏な実態をわからせてはいけない」「社会の仕組みを教えるはいけない」として、こうした運動を進める教師たちを弾圧した。1940 年（昭和 15 年）か

ら3年間で、綴方教育を進める教師たちは治安維持法違反の容疑をかけられ、全国で300人も検挙された。この昭和15年2月6日の村山俊太郎の検挙にはじまる官憲の弾圧を契機として、戦前の生活綴方運動は、大政翼賛体制（注9）の中でその終息を余儀なくされ、体制内化して、逆に「少国民」形成に活用されたともいわれている。

戦後は、幾多の世情の混乱や矢継ぎ早な教育改革の中で、1947年（昭和22年）、文部省から試案として学習指導要領が提示され、新たに教科として社会科が誕生し、かつて、「読み方・綴方」として独立に授業が行われていた国語科教育のありかたも、新教育の流れにそって言語経験重視の方向で見直され、小学校において国語科の中の「作文」という名称が用いられるようになっていった。以上が、よく知られる「生活綴り方」の経緯概略である。

このような経緯の位置づけをもつ「綴方」のうち、本論文取り上げる『綴方現地報告』が編成された当時の上海をめぐる国際情勢はどのような状況であったのか。小学生たちをとりまくその「現実」は、実に複雑であった。

蘆溝橋事件が起こったのは1937年7月7日夜であり、上海で日中両軍が戦闘状態に入ったのは約一か月後の8月9日であった。通説では、8月13日、上海で日中両軍の交戦が開始（第二次上海事変発生）されたと言われている。この衝突で、日本は二個師団を上海に派遣することとなった。続く8月15日、中国側も全国総動員令を発し、両国は全面戦争への道をたどることになる。上海の中国軍は、クリークと呼ばれる運河やトーチカという小要塞を頼みに、三か月あまりにわたり、日本軍に頑強に抵抗し続けた。

日本軍が日中戦争89日目の1937年11月上海を完全に制圧した。首都南京の占領は同年12月中旬であった。当時、上海や天津には、多数の日本人居留民がおり、日本人小学校もあったが、これらすべての、人も施設も、直接戦乱の影響を受けた。その内「幸運な日本人」は内地へ引き揚げることができたが、いやおうなしに現地にとどまらなくてはならぬ人びともあって、その子どもたちも両親と共に残留していった。9月上旬、戦火の上海から逃れてきた小学生や現地に残っている小学生たちの作文が紙面に出た。つまり、かれらは「戦争による影響をまともに受けた最初の被害者」（秋山1991:154）ということになる。

新居格が編集したこの『綴方現地報告』が発行されたのは、1939年10月10日、第二次上海事変が勃発してから約2年後であり、その2年間に、南京は占領され、徐州も占領された。1938年5月26日には、毛沢東が「持久戦論」を発表している。日本国内では、「ペ

ン部隊」が編成され、9月11日久米正雄ら従軍作家陸軍部隊、14日菊池寛ら海軍部隊が各々出発し、さらに、同年10月27日、武漢3鎮占領、12月20日汪兆銘らは抗戦派と衝突し重慶を脱出してハノイに到着し、同月30日に対日和平声明を行って、その翌年の1940年3月30日には、南京で汪精衛偽政府が正式に成立した。しかし、このような複雑で混沌とした国際情勢の中で、「アナーキスト」の新居格が、なぜ『綴方現地報告』を編集したのか？ その編集の意味はどこにあるのか？ 小島勝も、西村正男も、さらには『評伝新居格』を著した和巻耿介も、いずれもこの問いには明確な答を出していない。

とはいえ、新居格が書いた『綴方現地報告』「序文」を読むと、彼の意図を多少伺い知ることができる。

戦線の将士たちによつて、あるいは、従軍した作家や記者たちによつて、つまり、大人たちによつてなされた現地報告は、これまでに数多くわたしたちにもたらされました。それは大人たちの目や耳を通してなされたものですが、ここにあつめられた綴方は、現地在留の小學生たちの眼に映つた戦線記録であり、親しく味つた生きた體驗記であります。…日支事變がはじまつてから、現在の建設期にいたるまでの、ここにあつめられた綴方約三百数十篇はこれまでの大人たちによつてなされたさまざまな現地報告とちがつた、新しく且つ大切な示唆をわたくしたちに與へてくれるものと信じます。綴方が上手だとか、下手だとかいふそんな問題ではありません。さうした批評を超越した、尊い記録です。いつてみれば、この綴方集は、國民全體が、戦争を知り、支那の眞の姿をしりうる「國民讀本」と稱すべきものと思ひます（新居 1939：1-2、下線強調引用者）。

新居が考えた「新しく且つ大切な示唆」とは何か、それが本論文が探るところで、本稿を書く目的でもある。この「綴り方」は、新居の言葉を借りれば、「日支事變がはじまつてから、現在の建設期にいたるまでの」約三百数十篇の「支那在留」小學生たちの綴方である。ここでの「支那」は上海だけではなく、南部の香港、中部の杭州・済南・青島・大連・北京・山海関・張店・東北部の瀋陽といった範囲で、附録では「満州在留」小學生の綴りも載っている。「九・一八」事變起きた次の年1932年3月1日、傳儀の傀儡政權が成立、満州国となった。当時の日本にとって、「満州」は中国には属していない。『綴方現地報告』の中で満州兒童たちが書いた作文は「附録」に載せられた。

この作文集に掲載された作文は、中国に住む一年生から六年生及び高等科の「日本人」小學生の作文である。中国人や朝鮮人の作文も収録されているが、わずか6名しかいない（注10）。この本の定価は78銭、初刷りは約2万部である。「2万部は、当時では決して小さい数字ではない」（坪井秀人談）。この本の最後のページには、1938年（昭和13年）9

月付の「戦時体制版の宣言」という、第一書房長谷川巳之吉の以下のような「宣言」も掲載されている。

凡そ出版の事業たる一國文化のバロメタアを成すは言ふまでもありませんが、特に現下の如き戦時下の非常時局に當つては、その責務益益重大なるを自覺し、茲に物質涇済の根幹を成す用紙統制に則ると共に、大局からの國策に順應する新日本文化の創造に進んで協力寄與すべき決意愈々固きを信じてやまない次第です。私は第一書房設立以來十五年、一意或る理想をもつて出版を續けて來たのでありますが、特に今日に於いて一層、良書出版の意義とその必要の大なるを思ひ、出版報國を第一義とする戦時体制版の刊行に邁進するに至つたのであります（長谷川 1939：最終頁）。

5. 上海在留日本人小学生作文の中の上海・上海人印象（イメージ）

第二次上海事変勃発後、上海の日本人口は増大し、日本人児童も多くを占めた。彼らが上海に来て最初に残したその印象は、「上海には人力車がたくさん走つて居ます」（注 11）というものであった。上海の黄包車車夫との値引きの技巧も覚えた。

本節では、『綴方現地報告』の中の一部上海へのマイナス・イメージをもつ作文について詳細な分析を行う。これらの作文の中で、上海は、まず国際大都市としての印象が日本人の子どもたちの目に映った。上海に多様な人種が存在を認識している（「上海は日本に近い、上海は各国の人々が居住している」）（注 12）。しかし、上海のこの現代都市としての不衛生状況から、「穢い」印象を残す言葉も多く登場している。彼らが見た当日の上海の現実とその状況への攻撃的な文字の多さは吃驚するほどである（注 13）。

そこから、「しな人はパスを見せて『よし』。といはれないととほられませんが、ぼくたち日本人は、おじぎをしたらよいのです」（注 14）、だから日本人は偉い、といった子どもならではの短絡が生じ、上海の多様性は、支那人も西洋人もセンスが悪いというものがほとんどで、日本人だけが美しく存在するという、幻想に陥ることになる（注 15）。これは何も彼らが子どもであるから陥るイメージばかりであるとはいえない。あの芥川にも「穢い支那」パターンに簡単に陥る叙述がある（注 16）。日本を代表する作家と小学生との間に、「支那人」という他者表象でまとめられてしまう対象認識において、どれほどの差異があるのかを判断することは、かなり難しい。小学生の方が長き伝統をもつ中国文化への畏怖という「魔術」に引つかからないだけ、まだ正直であったともいえようが、日本の他者イメージが「穢さ」に反応するという基本構図は、実に徹底している。

これらの作文の中には、もう一つ別の特徴がある。それは、対比手法を使っていることである。彼らの作文は、上海の「マイナス・イメージ」と日本の「プラス・イメージ」とが対比的に認識されるという構図をもっている。相手国の醜い弱点を描くところによって、自我肯定の目的を達成することができるからであろう。

そうした事例として、たとえば、上海居留民團立東部日本小学校尋六アサ子の「支那の生活」の中に、「…屋根の低い小さな家に、大勢の人が住んでみます。朝起きると、日本人は齒をみがきますが、支那人は、みがく者の方が少ないのです。夏ですと、御飯は、大きなおちやわんに、おかづと、御飯が半分半分入れて、外で立つてたべます。少しいいのになりますと、長い椅子に腰掛けてたべます。日本人は、どうでせう。そんな不作法な事は、けつしていたしません」（新居 1939:246-247、下線強調引用者）といったものがある。

また、上海西部日本尋常小学校尋六河野一郎「四季の上海」は、「冬になると、支那人はボロボロの綿入れを着る。さうして家に居る。夜は、ひつそりして居る。日本人は上等の、綿入、羽織、オーバーなど」（新居 1939:242）といい、上海居留民團日本尋常高等小學校尋六野瀬義一「クリーク」では、「上海には無数のクリークがある。日本にはクリークといふものはない。内地の小川の水とクリークとを比べて見たら、全然違ひます。小川の水は、すみきつてみて、清い水である。一方クリークの水は、どろ水で、清い所は一つもない。しかも、其のどろ水の下には、支那軍の正き兵の死體が十數萬人もある。其のきもちの悪い水で、支那土民は平氣で、此の水を使用してゐる。例へば、お米を洗つたり、洗濯をしたり、又、水道の通つてゐない家の人は、わかしてのんだりしてゐる。僕等日本人には、たうてい考へられない」（新居 1939:242-243）と記している。

以上の事例から判るように、上海人と日本人の対比認識の構図の中においては、上海人はたくさんの病気を持っていて、“支那”は野蛮的で非文明の国で、のんきな国民であつて、日本と日本人との鮮明な対比がそこに形成された。これらの描く対比が、上海の日常生活の各場面にも及んだのだといえる。

子どもの目は鋭い。しかし同時に、筆者には、一つの大きな疑問がある。

「其のどろ水の下には、支那軍の正き兵の死體が十數萬人もある」という叙述の中において、なぜ、日本人小学生たちは、ただ「穢い」という観念しか想起していないのかということである。つまり、なぜ、日本人小学生たちは、「なぜあの水のしたに十數萬人支那軍の正き兵の死體があるのか？ 彼らはどうやって死んだのか？ なぜ上海人はあの「穢い」水を飲まなければならないのか？」といった質問を発しないのか？ なぜあのようなたく

さんの死体を見たあとに、「可哀想」という感想すらないのか？ これは冷酷ではないだろうか？ また逆に、「支那軍の正き兵の死體が十數萬人」の叙述の後に、彼らはわれわれの英雄である日本軍によって殺されたといった、直接的な「賛美自慢」の叙述がないのか？

このような疑問が生じるのは以下のような理由からである。上海居留民團立第二北部日本尋常高等小學校尋四梶原芳子を書いた『上海』に、「…私等が外國へ來ても、かうして内地と同じ様に勉強出來ます事は、ほんたうに有難い事です。いつも、私等を守つて下さる兵隊さんに感謝してゐます。此の事變に、現地に居る私等は戦争の跡を見ると、日本の兵隊さんがどんなに強いかなと言ふ事が分ります。」(新居 1939:124、下線強調筆者)とある。この下線強調部分の叙述はいかにも曖昧である。ここでいう「戦争の跡」というのは一体どういうものなのか？と読者は疑問を生じる。また、このような大人びた抽象的な書き方は子どもたちの天真浪漫的な心理に合わない。このような疑問が生じる原因は、むしろ、論証可能な素材はここにはなく推測でしかないが、実は、ここでいう「戦争の跡」、「日本兵隊さんがどんなに強いかな」=「支那軍の正き兵の死體が十數萬人」ではないだろうか。

どうして、はっきりと書かないのだろうか。この「支那軍の正き兵の死體が十數萬人」と「感謝すべき日本兵士」を一緒に記すこと自体を不適切であると判断したのではないのか？

私は、これらの作文は彼らの父母や先生たちの修正を受けた可能性が高いと考える。たとえば、東京高等師範学校訓導『文話指導綴方優良文集』にある「支那の少年少女諸君へ」という作文について、先生は文末に「評」を付けている。「まことに、純眞な、しかも熱情のこもつた文です。日本がどんなに立派であるかを知らせ、かういふ立派な國、かういふ立派な精神をもつてゐる日本人と、早く仲よくしよう、それには子供である自分たちからといふ日本少女の眞の氣持ををよく語つてゐます。これをみたら、支那の少年少女諸君も、みなさんと仲よしにならずにはゐられないでせう」(田中 1939:162)とあるが、それは当時の“戦時総動員”体制下の日本人の「自己欺瞞」、日本の「子どもへの欺瞞」の一つのよい事例であるともいえる。

6. 作文と記録映画の中の戦争記憶落差

『綴方現地報告』の中に、比較的によく描かれた「支那人(上海人)」のマイナスイメージ以外に、1937年8月13日に上海で起こった戦争を体験した日本児童の戦争に関する直

接な印象と記憶を描くものは上海在留日本人小学生作文の約3割を占めた。上海にいる小学生たちは先にその後、日本本土にいる小学生たちも体験する「爆撃の悲惨な光景」を体験した。

ひろん、1937年8月13日に上海で起こった戦争についての記述は、戦争イメージや体験についてかなり緩られている。つまり、戦争自体を記述するという特殊な経験を上海が引き出していることになる。「戦争」を「戦争」と呼ばずに、「事変」という言葉で緩和しているとはいえ、子どもに与えた「現実」の衝撃の大きさについて、具体的な「上海戦場」の報道をみてみよう。

1937年9月1日『日本小学生新聞』（『東日小学生新聞』）に掲載された、上海日本中部小学校五年生鈴木安子の「砲煙けむる上海から」は次のようにある。

なつかしい遠い日本のお友達、たのしい夏休をいかにしていらつしやいます。私は、暑い上海にをります。そして、今は皆様もごぞんじの戦地です。毎日毎日朝となく、昼となく夜になつても、むはふな支那兵は大砲をうち出し、空からは、ばくだんを次から次と、所からはず落して、ものすごい黒煙を上げ、高い建物をこはしたり、火事をおこして居ます。住む人々はそのおそろしい音に、おびやかされて、まんじりともぬむる事が出来ません。私のお友達や、近所の人達は、我先へと内地へ引上げて行きました。残つた私は一人になつて毎日さびしい、おそろしい中にもお母さんといつしよに兵隊さんのおせわをしてをります。私の家もけんべいさんの事務所になつてあます。陸戦隊の水兵さんは、昼の暑い日光の照るなかを武装すがたもいかめしく、頭に重い鐵かぶとをかぶつて、夜は消灯暗い街をくつ音高く飛びまはつて我等のために、働いて下さいます又、お父さんや同文書院、商業の生徒達も、腕章をつけた手を上げたり、声高くはり上げ何事が云つては、いそいで走つてあちらこちらへかけまはつて働いていらつしやいます。その度に、又、何かあつたのかとびくびくして、私は一寸外をのぞきます。もう外をあるいてゐる人はわづかな人で、学生など見たくともをりません。ほんとにいつになればこんなに荒れはてた上海が元のにぎやかな平和なそして各国の人が、安心して出あるく事のできるやうな街になるのでせう。私はそればかりを神においのりしてをります。どうか皆様おからだを大切にして下さい(秋山 1991 : 152)。

この種の作文は新居格編の『綴方現地報告』にも多く見られ、以上はせいぜいその中の一段にすぎない(注 17)。これらの作文の中に我々は彼らの上海嘗ての賑やかさと平和に戻ることを祈るが、それを中和するかのような「平和」と「安心」といった言葉を読むことができる。しかし、このように、小学生にとってはトラウマも残りかねない悲惨さのイメージと記憶とが、罪悪感を生じ、「陸戦隊の水兵さんは、昼の暑い日光の照るなかを武装すがたもいかめしく」、「我等のために働いて下さいます」などによって、「誇り」と「感激」

に取り変わる。これによって、日本軍国主義宣伝教育が日本小学生へ毒害を与えたではないか（注18）？

上海居留の日本人小学生たちの綴方を検討していくと、ここで一つの疑問が生じる。それは、小学生たちの戦争体験が呼び覚ます「怖さ」についてである。

たとえば、1937年9月11日の『東日小学生新聞』の「上海戦を目の当りに見て」というタイトルの下には、以下のように、上海総領事館検事佐藤吉重さんの長女佐藤マサ子（十歳）の一文「思ひ出」を添えられていた。

…夜はをぢさんたちの「電灯を消して下さい」といふ大きな聲がします。私共も眞暗にして御飯をいただくのも、一寸らふそくをつけるだけ。かうして二、三日すごしましたが、やうやくなつかしい日本にかへれる事になり、十六日の一時前、人、一人も通らない町をマートー（船のつくところ）に急ぎました。そして私たち千五百人を乗せたお舟は、たくさんの軍艦に守られて兵隊さんに「ばんざい、ばんざい」をして、二十二日におばあさんのある下館にかへる事が出来ました（秋山1991：153）。

事実上は危険な上海からの撤退であるのに、なぜ「ばんざい、ばんざい」というのか？ 亀井文夫編集・松井翠声解説の『上海一支那事変後方記録—3』というドキュメンタリーの中に、取材を受けた上海在留日本人小学生のシーンがある。そこで、「戦争は怖いですか？」と聞かれると、子どもたちの反応は「怖くない」と言っている。一方、先に見たように綴方では、「怖い」といった記録は何人もの子供によって記されている。この落差をどのように解釈すべきか？

カメラの前では「恐くない」が、その体験を「綴る」と「恐い」ことになる。では、綴られた印象は、その子どもたちの内奥からやってくるものの記述として、より実感に近いものであると理解してよいのかどうか、それが問題である。

「天真爛漫」な子供たちは、大人や撮影機材に囲まれている中で、ほぼ興奮している状態であり、このときの話は、かならずしも本音だとは言えない。綴方についてもそうであるが、教師の指導の下、或は両親の指導の下、作品が描かれ、書かれた後の大人による朱筆修正も考えられる。映像ではそこにおける「演出」という問題も派生する。

戦時中の報道演出については、いろいろな資料がある。たとえば、上海市档案馆資料 Y6-1-389（全26頁）には、当時、日支親善のために、あたかも「解放軍」であるかのような日本軍の振る舞いを演出する、いわゆる「占領政策」に従う報道が、いくつも残されて

いる。

例えば、「宝山県自治委員会会長英汝珠氏と村の子供たち」という写真がある。宝山県自治委員会看板の前で、会長と同村の子供たちが集まって、写真を撮ったものである。

写真に写った中国上海市郊外の子供たちは、一所懸命笑顔で拍手して日本軍を大歓迎しているように撮られているのであるが、その写真を詳細に見ると、会長の前にいる子供が実は泣いており、会長は子供たちの頭を撫でている。また、同じ写真の右では、ある中国婦人が子供の手を取って、拍手をさせていた。左下の子は、拍手はしているが、実に恐怖の眼差しで何かを見つめている。

むろん、この写真の演出対象は、戦時中の中国上海人の子どもたちであるが、その本質は亀井が編集した記録映画『上海』の中の子供たちと同じである。

子供たちのイメージは常に大人たちのイメージの反映でもある。その大人たちのイメージの違いも、そこには反映されている。ドキュメンタリー編集をした亀井文夫は、子どもの形象を文部省型の「綴り方」のようにはしなかった。新聞とドキュメンタリー映画という、こうした当時のメディア間の担い手の差異の問題についても、深く掘り下げていく必要があるだろう。

上海に在留していた、ここに紹介した日本人小学生達は、1945年8月の日本敗戦時には、ちょうど15歳から20歳になっている。年長の者は特攻隊に入隊し、特攻機と共に青空に散った人もいただろう。関東軍に見捨てられ、近代日本史上においてほとんど唯一の事例ともいえる「日本人難民」となった、満州の8月15日を経験した在留日本人たちに比べれば、上海にとどまっていた日本人の方がまだ幸いであった。ほとんどの上海在留日本人は、引き揚げ船に乗り日本国に帰ったからである。彼らのこうした運命を考えてみても、戦争遂行の過程で軍部の意向を体現していくべく創られていった子どもたちが、時代の空気を媒介するメディアとして使われていたことの意味は実に大きいといえよう。

7. まとめ

以上のように、日本人小学生作文、『日本小学生新聞』、記録映画『上海——支那事変後方記録-3』、そして、上海市档案馆資料 Y6-1-389（全26頁）などに基づいて事例分析を行ってきたが、ここで、次のような問題提起をして、本稿における小括としたい。

本稿で着目したいのは、蘆溝橋事変（中国では七・七事変）、第二次上海事変（中国では八・一三事変）以降の日本人小学生たちが、どのように上海を見て来たのか、どのような印象を残したのか、日本小学生たちの視線と心理はどのように変化をしたのか、彼らの作文のモデル化などの問題であった。

本来ならばこうした分析に加えていくべき対象は多いのであるが、ここではとりあえず小島に倣い『綴方現地報告』に集中し検討をした。

検討を通じて、〈見たまま聞いたまま〉としての綴方が標榜するリアリズムには、どのような限界があり、それと映像というメディアの新たなリアリティの構成するシャンハイ・イメージにはどのような落差があるのか、そして、「抗日」、「排日」の文字はなぜ、どのように子どもたちの記述から消されたのかという問題も浮上した。現実の上海の街には夥しく「抗日」、「排日」の文字が存在したが、そうした壁面のスローガンやビラの文字を見ている子どもたちは、いかに自らの視線を歪めたのであろうか。

これは亀井の作品『上海』に自然に投影されている上海の現実と、綴り方の内容との落差をどのように埋めるのかということでもあるのだが、“消された文字”を再現するという大変な作業になるだろう。

戦争という現実の前で、「日本人でよかった」と自覚を促進させるシャンハイ・イメージの諸問題もある。戦争の「恐怖」を描くときに、なぜこのような印象を生じるのか？ これは彼らのいかなる真実の感情を反映させたものなのか？ それとも、大人によって直されたものなのか？ 日本による中国侵略の正当化の〈メディア〉となることを期待された子どもたちの声が、いかに権力により操作され、「少国民」形成に到ったのか？ 「外地初等教育指導」についての資料を探索していく上で子どもたちのシャンハイ・イメージの創られ方への理解にも通じていくであろう。むろん、戦争中の教育にまで及ぶ問題をさらに掘り下げていく必要がある。

こうしたさらなる疑問、問題については、今後の課題にしたい。

注

1、「中国」という呼称が日本で使用され始めたのは中国政府（中華民国政府）の要求で外交文章として登場した 1930 年のことであり、この呼称が日本で一般に用いられるようになったのは戦後 1945 年以降のことだという問題である。つまり、1945 年以前には、日本人に「中国イメージ」など存在

しなかった。それらは「支那イメージ」や「上海（シャンハイ・）イメージ」に他ならなかった。それは「上海」がもともと「中国」や「支那」とは何か異なる空間や現象の表象であったからである。むしろ1930年前後に到る以前の「上海イメージ」は、「中国（「支那」）イメージ」と交換可能な部分があった。幕末以来の日本人の多くが最初に降り立つ「中国（「支那」）」は、上海に他ならなかった。本論文では「シャンハイ」といった表記方法を用いる場合があるが、それはこの都市のイメージが放つ多様多義的性格を表現するためである。

2、実際のところ、1945年以前の日本語の文書において、「中国」の呼称は、昭和5（1930）年10月の閣議（幣原外相の時）において、それまでの「支那共和国」を改め公式文書では「中華民国」と呼ぶことにしたため、以降の外務省など日本政府関係文書に用いられるようになったことにほぼ限られている（「支那」（村田雄二郎）『岩波現代中国事典』1999年岩波書店所収参照）。それ以前には、たとえば、日本に留学していた秋瑾は詩詞に「漢民族の国家」の意で「中国」という呼称を用いたことがある。だが、一般に、これは清末において自称「大清」と号していた満州民族王朝に対抗して、「漢民族の国家」ということを表すために、梁啓超、魯迅、秋瑾、柳亜子、孫文等の漢民族主義者が使っていた用語であった（秋瑾「支那逐魔歌」等参照）。さらに近年では、新浪網会社の経営する中国最大規模のポータルサイトに「sina（シナ）・ネット」（<http://home.sina.com.cn/>）があり、一部の学者から「シナ（支那）は中国の蔑称で、シナを名乗るのは国辱的だ」と改名要求が出されていたこともあったそうだが、何事もなかったかのように現在でもその名称のまま盛んに運用されている。そして、「支那」という言葉について、すでに多くの研究が発表されている。たとえば、日本では、佐藤三郎の『近代日中交渉史の研究』に、一節を設け論じている。中国では、現在天津理工大学教授の劉家鑫が、『日本近代知識分子の中国観』に、「支那」についての歴史経緯を詳細に論じた。したがって、本論文では、「支那」を「中国」に書き改めるといった操作は一切していない。同様に、改訂版文献などの場合でそのような訂正が施されているものについて、発行当時のものが参照できなかった場合には、敢えて再訂正するようなこともしていない。

- 3、 “作文” は日本語では「綴方」ともいい、教師の指導の下で為される学生たちの習作を指す。
- 4、 広辞苑によれば、もと、日本固有の領土を内地といったのに対して、それ以外の領有地、すなわち朝鮮・台湾・樺太などの総称を外地という。
- 5、 創刊当時、「日本小学生新聞」は、タブロイド判（一般の新聞紙の約半分の大きさ）の四ページ仕立てで、月ぎめ購読料金は二十五銭、これは講談社の雑誌「幼年倶楽部」の定価の半額である。当時では「二十五銭の小遣いがあれば、おまけ付きのグリコを五箱も買うことができた」。（秋山 1991：47）を参照。

- 6, 亀井文夫編集・松井翠声解説 1938『戦記映画復刻版シリーズ 上海—支那事変後方記録 3—』東宝映画文化映画部制作。
- 7, 新居格 1929①、同 1929②、同 1931、同 1934、同 1935、同 1937。
- 8, 『魯迅日記』によると、1934年5月30日新居格に『無題』という詩を書いて提供したとある。内容は、“万家墨面没蒿莱、敢有歌吟動地哀。心事浩茫連広宇、于無声処聽惊雷”（周國偉 2006：243）。
- 9, 1940年10月、第2次近衛内閣の下で新体制運動の結果結成された国民統制組織。各政党は解党、また産業報国会・翼賛壮年団・大日本婦人会を統合、部落会・町内会・隣組を末端組織とした。1945年5月解散、国民義勇隊に吸収され解消（広辞苑を参照）。
- 10, 当時台湾と朝鮮の小学生たちも日本小学校に就学していたが、彼らのパスポートは日本国籍であった。
- 11, 上海西部日本尋常小學校尋四久保田和子の「上海の乗物」：上海の乗物には電車、自動車、二階のバス、馬車、人力車等あります。…上海には人力車がたくさん走つて居ます。多い事おぼつくりします。支那では人力車の事を黄包車と書いてワンポーツオと呼びます。このワンポーツオはお金が安いのでちよつと乗るにはとてもべんりです。乗る時にワンポーツオと呼びますと、あちこちからくろ山のやうに走つてよつて來ますので中でも一番きれいなのに乗ります。それでも他のワンポーツオはべつにおこりません。ワンポーツオに乗る前に「十錢はらへばよい。」と思つて、「十錢で行くか。」と言ひますと、きつと二十錢などでたらめを言ひますから、「それではいけない。」と向かふへ行きますと、あはてて、「好！好！」と言ひながら寄つて來ます（新居 1939：127-129、下線強調筆者）。
- 12, 上海中部日本尋常小學校尋四須藤佳子の「内地の友へ」：…日本の長崎かられんらく船に乗れば、わづか一晝夜で來る事の出来る、この「上海」は支那では一番大きな都會で、よい港のある所です。…上海中に住んでゐる人は、皆で三百萬もあるとの事ですが、大部分は支那人で、其の外に私たち日本人や、イギリス、アメリカ、フランス、イタリー、ドイツ、ロシヤ、インドなど色々の外國人がたくさんゐます。日本人は、事變の前には三萬人ばかりだつたさうですが、此の頃はほとんど内地から入つて來ますので、もう五萬人も居るとの事です。それでお友だちもたくさんふえ、私たちは喜んでゐます。日本人が多くなるので、今年から小學校もふえ、新しく中學校も一つ出來ました。そしてお國の爲になる工場や會社などが次ぎ次ぎに出來て來ます。今、上海にある日本の學校は、小學校が五つと、中學校、商業學校、女學校が、それぞれ一つづつと、もう一つ上の學校（同文書院大學）があります（新居 1939：118-119）。
- 13, 上海居留民團立第二北部日本尋常小學校尋二中野葉子「上海の人」：上海には、日本や、イギリスや、フランスやドイツや、アメリカや、まだ私たちの、しらない方々の國から、たくさんな人があつ

まつてみますが、やつぱり支那人が一ばんおまいです。私もやつぱり、今日日本からお父さまやお母さまにつれられて来ました。

上海は、たくさんの支那人がみちばたに、つばをはきますから、たいへんきたくないやうです。それに、せいやうの人や支那人はかみのけにパーマネントをかけて、ぐちやぐちやにしたり、爪をながくのぼして赤くそめたりしてあります（新居 1939:39-40、下線強調引用者）。

上海西部日本尋常小學校尋六河野一郎「四季の上海」：…インド巡査・支那巡査が、ピストルを持って立つて居る。上海は泥棒や、かつばらひが多いからだ。上海の巡査は、皆工部局に勤めて居る。

支那にはいろいろ病氣が多い。例へば、コレラ・チフス・マラリヤ・天ねんとうなどが特にひどい。支那はやばんな國だ。非文明の國だ。ゴミためには「はい」が「ぶんぶん」言ひながら黒山のやうにたかつてある。コレラの死人を、大通にほかして平氣で居る。「はい」のたかつた御飯を平氣でたべる。實にのんきな國民だ。日本人が普通、食べて居る食料は、ほとんど、内地とかはらないが、時には支那料理などたべる。支那人は油っこい物が好きで、菜を油でいためて、からしと一しよにたべる。

…冬になると、支那人はボロボロの綿入れを着る。さうして家に居る。夜は、ひっそりして居る。日本人は上等の、綿入、羽織、オーバーなど（新居 1939:240-242）。

14、上海居留民團立日本尋常高等小學校尋二吉田至「上海に來て」：…上海には大ぜいいくせんたいのへいたいさんがおられます。またまちの中には、ほしようさんがみえます。しな人はパスを見せて「よし。」といはれないととほられませんが、ぼくたち日本人は、おじぎをしたらよいのです。おかあさんが「おじぎをする時は、へいたいさんありがたうございますとおもつて下さい。」とおつしやいました（新居 1939:25-26、下線強調引用者）。

15、上海居留民團立第二北部日本尋常小學校尋四梶原芳子「上海」：私は、昭和十年に上海へ來ました。今年で足かけ五年になります。一番不思議に思つた事は、河の水が茶色をしてゐる事でした。丁度、日本の川に大水が出た時、泥水になる様に何時もきたない色をしてゐます。…上海は、六十何ヶ國の外國人が集つてゐるさうですが、一番多いのは日本人ださうです。私等の住んでゐる北部方面は、事變前から日本人が集つてゐましたが、事變後は、ほとんど日本人ばかりになつて、町も家もきれいになり、日本の町としか思はれぬ様になりました。（新居 1939:123-124）。

16、…その一人の支那人は、悠々と池へ小便をしていた。陳樹藩が叛旗を翻そうが、白話詩の流行が下火になろうが、日英同盟が持ち上ろうが、そんな事は全然この男には、問題にならないのに相違ない。少くともこの男の態度や顔には、そうとしか思われぬ長閑さがあった。曇天にそば立つた支那風の亭と、病的な緑色を拵げた池と、その池へ斜めに注がれた、隆々たる一条の小便と、——これは

憂鬱愛すべき風景画たるばかりじゃない。同時に又わが老大国の、辛辣恐るべき象徴である。私はこの支那人の姿に、しみじみと少時眺め入った。が、生憎四十起氏には、これも感慨に値する程、珍しい景色じゃなかったと見える。

「御覧なさい。この敷石に流れているのも、こいつはみんな小便ですぞ。」

四十起氏は苦笑を洩した儘、さっさと池の縁を曲って行った。そう云えば成程空気の中にも、重苦しい尿臭が漂っている。この尿臭を感じるが早いか、魔術は忽ちに破れてしまった。湖心亭は畢に湖心亭であり、小便は畢に小便である、私は靴を爪立てながら、忽々四十起氏の跡を追った。出たためな詠嘆なぞに耽るものじゃない（芥川 2001 : 24）。

17、例えば、尋二の児童が書いた「じへんのこと」、尋三の児童が書いた「支那事変」「戦争が始まってから」、尋四の児童が書いた「大山大尉と貴志中尉と斉藤一水さん」「事変についての思出」「事変の思出」「眼のあたり見た戦争」「戦争の思ひ出」「支那事變の思出」「戦争」「こはされた上海」、尋五の児童が書いた「眼のあたりで見た戦争」「有難い日本の国」、尋六「[こくい支那のたま]」「ひなんして居た時」「ひなんの時」「眼のあたり見た戦争」「思はずこぶしを握りしめた事」「事變の思出」「上海戦」「事変後の伸びゆく国際都市上海」高等科一年「龍田丸に乗る」「事変日記」、高等科二年「目のあたりに見た戦争」「遺骨の見送り」「英霊を見送る」などがある。

18、国民学校案の紹介では「国民科」について次のように記されている。

御承知の通り昭和十六年四月より現在の小學校が全部國民學校に一大改革をされることとなりました。今までの様に、自由主義の教育とか、平等主義の教育とか、いつて、歐米的な教育理論や、つぎはぎした、スフ入れ式の教育は、總て清算されて、飽まで我が國體の本義を明らかとし、日本本來の世界觀に立脚した「皇國の道に歸一する」教育が施されることになるのであります（井口 1940 : 11、下線強調引用者）。

また、同書には「少年團」の記事があった。「團旗授與並女子少年團結成式」で上海日本櫻小路少年團健児代表の宣誓は次の通りである「本日はかがやく我等の團旗を御受け下さいまして、誠にありがとうございます。私達は此の名譽ある團旗の下に一致協力、益益健児道の修練に努め、團旗の名譽を永遠に失はず、愈愈其の光輝を増やすやうに奮闘いたします。茲に私たちの心からなる誓を申上げて御禮のことばといたします」（井口 1940 : 68）。

参考文献

秋山正美編 1991 『『日本小学生新聞』の誕生』『小学生新聞に見る一戦時下の子どもたち—第1巻』日

本図書センター

芥川龍之介 2001〔1925〕『上海遊記・江南遊記』講談社

井口績編 1940『大陸に育つ 皇紀二千六百年記念号』上海第二北部日本尋常小学校

熊木哲 2003『日満綴方使節』とその作品—昭和十四『東日小学生新聞』の懸賞「綴方」について—

大妻女子大学編『大妻女子大学紀要』33号、第207-215頁

小島勝 1993『第二次世界大戦前の在外子弟教育論の系譜』龍谷学會

—— 1999a「上海の日本人学校の性格」小島勝・馬洪林編著『上海の日本人社会—戦前の文化・宗教・教育—』永田文昌堂、第135-197頁

—— 1999b『日本人学校の研究—異文化間教育史的考察—』玉川大学出版部

——編著 2003『在外子弟教育の研究』玉川大学出版部

佐藤三郎 1984『近代日中交渉史の研究』吉川弘文館

鈴木七郎 1940『皇紀二千六百年記念 日本民族小学生作品集』日本力行會

高崎隆治 1995『戦場の女流作家たち』論創社

田中俊弥 1998「文集実践の教育史的考察—生活綴方の動向をめぐって—」平成10年度文

部省科学研究費補助金基盤研究(C)(1)研究成果報告書 (<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~toshiya/2semi/bunshu.htm> 2007年1月18日再終参照)

田中豊太郎 1939『東京高等師範学校訓導 文話指導綴方優良文集』大日本雄辯會
講談社版

坪井秀人 2006『感覚の近代—声・身体・表象—』名古屋大学出版会

鶴見俊輔 1983「日本のプラグマティズム—生活綴り方運動—」赤い鳥の会編『「赤い鳥」と鈴木三重吉』小峰書店、第41-63頁

——他 1956『現代日本の思想』岩波書店

新居格 1929①「銀ブラ上海」『中央公論』1929年11月号、第189-200頁

—— 1929②「上海の小集その他」『近代生活』1929年11月号、第73頁

—— 1931「上海の散瞥」『犯罪科學』1931年第2巻11月号、第154-160頁

—— 1934「支那を斯く見たり」『改造』1934年8月号、第1-17頁

—— 1935「上海」『文芸』1935年3月号、第71-95頁

—— 1937「上海の印象」『日本評論』1937年10月号、第365-371頁

——編 1939『支那在留日本人小学生綴方現地報告』第一書房

西村正男 2003「新居格と中国—あるアナキストにとっての「国境」—」『徳島大学国語国文学』2003

年第16号、第48-24頁

林京子 2001『上海・ミシエルの口紅』講談社文芸文庫

マロウ、アンドレ（新居格訳） 1930「訳者序」『熱風—革命支那の小説—』先進社、第1-3頁

村田雄二郎 1999「支那」『岩波現代中国事典』岩波書店

劉家鑫 2007『日本近代知識分子の中国観』南開大学出版社

和巻耿介 1991『評伝新居格』文治堂書店

周國偉 2006『魯迅と日本友人』上海書店出版

上海市档案馆資料 Y6-1-389

映画

亀井文夫編集・松井翠声解説 1938年『戦記映画復刻版シリーズ 上海—支那事変後方記録3—』東宝

映画文化映画部制作

スティーブン・スピルバーグ監督 1987年『太陽の帝国』アメリカ映画